親鸞自筆『西方指南抄』における漢音について

佐々木　勇

一、本稿の目的と対象資料

古訓点資料を用いて日本漢字音研究をする立場からは、より純粋な日本漢音資料・日本呉音資料等が求められる。

しかし、いわゆる字音直読資料であっても、漢音のみ、あるいは呉音のみの加点資料は現存しない。漢文訓読資料や漢字仮名交じり文では、漢音・呉音はより高い割合で混在する。そのような文献を漢字音研究資料として活用する場合、漢音と呉音とを区別する必要が生じる。また、目的によっては、区別した漢音・呉音のどちらかのみを対象とすることになる。

一方、当該文献の漢字音・漢語音の全体を見渡した場合、呉音読中心資料中に混じる漢音、漢音読中心資料に見られる呉音はどのようなものであり、なぜ存在するのかが問題となる。

山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』（二〇〇六年、汲古書院）は、多数の表白における音注を分析し、注音例が漢音に偏ることから、「僧侶の日常常用音（非呉音）から外れた漢音読語」に加点が集中したのであろうことを指摘した（第二部第四章780頁）。

本稿の筆者も、呉音読が中心である親鸞自筆『教行信証』に、漢音集中箇所が存することを述べた。[1]『教行信証』では、親鸞自筆訓点から知られる漢音読は次の箇所に集中していた。

『辨正論』訓読部分、『龍舒浄土文』訓読部分、『楽邦文類』訓読部分、親鸞自身の文書。

これらは、漢音読されるのが当時一般的であり、呉音読中心の『教行信証』にあっても、親鸞は当時の慣習に従って漢音を加点したものと考えられた。この考察は、訓点加点が豊富であり、かつ、比較的分量が多い親鸞加点資料を対象とすることで可能となった。

親鸞遺文内で同様の条件を備える文献を他に探すと、『西方指南

抄』が選ばれる。親鸞自筆『西方指南抄』（一二五七年書写。以下、単に『西方指南抄』とする）は、漢字片仮名交じり文を基調とする。[2] そして、その中に漢文を交える。その漢文には、漢訳仏典やその注釈書があり、また、日本で作成された伝記・記録・文書がある。

この『西方指南抄』の大部分の漢字に、親鸞は音注・訓注を片仮名で記している。[3]『西方指南抄』は、『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）二巻分を占め、当時の言語研究に堪えうる分量を持つ。

本稿は、この呉音読中心資料『西方指南抄』を対象として、資料中に見られる漢音はいかなるものか、その漢音はなぜ加点されたのかを考察することを目的とする。

二、研究方法

本稿の目的から、まず、『西方指南抄』の豊富な音注に基づき、当該字当該箇所に加点された音について、漢音・呉音等の判定を行なう必要がある。

その上で、漢音の加点に偏りが有るものか否かを確認する。

漢音・呉音・漢呉同音の判定は、平安・鎌倉時代の古訓点資料・古辞書・音義の音注に依る。[4] ただし、『教行信証』と較べて、本資料には声点加点例が少ないため、「事―呉音ジ・漢音シ、道―呉音ダウ・漢音タウ」のような関係の場合、いわゆる清濁の相違から漢音・呉音を判定することが、ほとんどできない。そのため、このような場合は「判定不能」とする。[5]

この方針で、『西方指南抄』冒頭から末尾までの一々の漢字について、親鸞加点の訓点に基づいて、漢音・呉音・漢呉同音・梵語音・判定不能を区別していく。

そうして見出された具体的な漢音読字・漢音読語を列挙した上で、その漢音読字の存在理由を考察することとする。

三、調査結果

1. 音注加点漢字数

『西方指南抄』の漢字音注の総数は、仮名音注と声点とを合わせて、二〇二二三例である。（仮名音注の中には、「サタ」（沙汰）のように、本文中で仮名書きされている漢語例を含む。）

仮名音注加点漢字数（延べ）　二〇一四例

声点加点漢字数（延べ）　七九例

声点加点例は音注全体の0.4％に過ぎない。[6]

そのわずかな声点加点例も活用して、『西方指南抄』の当該音注の漢音・呉音等を判定すると、次の数となった。

漢音（延べ漢字数）　二八二例

呉音（延べ漢字数）　九〇一四例

漢呉同音（延べ漢字数）　七七九八例

判定不能（延べ漢字数）　二九三七例

梵語音写（延べ漢字数）　一〇八例
慣用音（延べ漢字数）　五例

『西方指南抄』が呉音読中心資料であるとされる具体的な内容は、右のとおりである。

漢音読されている漢字数（延べ）は、全体の1.4％でしかない。

本稿は、この1.4％の漢音読字に注目する。

2．漢音読字の具体例

以下、その漢音読字を含む漢語の具体例を、固有名詞と一般名詞とに分けて掲げる。

A．固有名詞

文脈上特定の人物を指している「和尚」「尼公」などの一般名詞もここに挙げることとする（漢音読字には左傍線を引く）。[7]

a 年号類　建暦（314.4・357.5・364.2・367.3・432.5）、建仁（273.5・276.6）、建久（267.4）、元久（278.2・401.6）、久安（411.5）、文治（423.6）、齋朝（185.6）。

b 人名類　善導和尚（99.6・153.2・177.2・193.5・202.3・207.2・210.5・248.2・252.3・394.4・471.2・523.3・534.3・545.3・548.3・553.2・557.4・579.1・607.5・635.2・641.1・661.1・826.5）・善導和尚（256.4）・導和尚（199.1・292.4）・和尚（439.6・442.1）、陶隠居（186.5）、公胤（262.4・438.1・438.3）、康慶（289.2）、運慶（289.2）、宗慶（402.3）、蓮慶（426.2）、貞慶（425.4）、法橋教慶（267.5）、順西（348.1）、寂西（402.3）、幸西（402.4）、蓮生（402.5）、重源（425.6）、隆寛（374.5）、上西門院（412.6）、華山院（369.2）、始皇（232.6）、准后（346.3）、尼公（384.4・384.6）、光親郷（卿）（314.5）・兵部郷（卿）（677.2）・ヒヤウフキヤウ（兵部卿）（669.4）。

c 地名・寺名類　并州（188.5・189.5・190.6・753.4）、天臺山（382.2・426.4）、東山（340.6・432.6）、修南山（192.1）、五臺山（756.6）、白馬寺（201.2）、大（去）原（190.6）、没水（190.6）、三縣（190.6・753.4）、ハクサイ（百濟）（65.3左）。

B．一般名詞

以下、複数の加点例が有った漢音読字を先にして、漢音注の五十音順に一般名詞を挙げる。

1 闇（508.6）・黒闇（396.6）・明闇（831.6）・癡闇（392.1）、2 殿重（258.2）・慇重修（869.6）、3 影像（183.4）・影堂（202.3）、4 禪下（411.3）・殿下（430.6）、5 舊跡（395.1）・舊里（780.2）、6 去年（365.2・366.1）・近去（422.1）、7 籠居（404.4・424.2）・居（432.6）・群居（405.6）、8 御宇（413.6・429.4）、9 近來（63.3・66.1・681.3・719.3・894.4）・近代（289.1）、10 本懐（287.6・288.1）・

素懐（40.4・386.3・440.4）、11功（158.1・195.2・324.4・414.5・643.2・741.6）、12沙汰（239.1・401.2）・無沙汰（513.4）・サタ（沙汰）（563.6・581.3・596.2・692.6）、13高山（419.1）・本山（777.2）・山河（282.4）・山腹（280.3）・登山（411.1）、14終焉（25.2・27.2）、15食肉（394.1）・不食（315.3）・食（200.1）、16當世（260.2・760.1・775.4）・遁世（382.2・411.6）、17長生不死（187.2・188.1）・長生（187.5）・平生（293.2・293.4・406.6）、18碩徳（431.5・439.3）・碩學（423.5）、19遺弟（404.4）・兄弟（480.6）・師弟（768.5）、20都共推算計（113.6）・南都北嶺（423.5）、21无爲（399.1）・无雙（186.4）、22神妙（708.2・908.5・911.2）、23奉公（464.5・464.5）、24明明（414.4・427.2）、25蒙昧（433.2・434.1）、26請用（370.5）、不用聞（761.1）、用事（484.6）、用心（407.3）、27霊瑞（192.6・199.5）

鸚鵡（281.3）、暗誦（773.2）、中陰（407.5）、眼前（412.1）、諷諫（432.2）、禁遏（401.3）、綾羅錦繍（119.2）、異香（436.5）、他郷（878.5）、无而欺有（16.2）、外見（267.2）、頑嚕（820.5）、恐々（683.3）、狂乱（717.3）、凶敵（410.2）、月面如來（112.2）、流刑（432.3）、別業（432.6）、不足言（681.6）、後悔（759.5）、三帀（142.4）、愁歎（401.2）、宿因（809.4）、日月（399.1）、大小老（上）若（入濁）（436.2）、儒（233.1）、矯飾（297.2）、唐人（361.2）、潔齋（295.2）、カムセキ（岩石）（743.6）、緇素（435.3）、大（去）綱（414.6）、小女（343.5）、停午（437.3）、天聽（432.1）、涕唾（872.2）・啼唾（191.2）、御トウリウ（コ逗留）（563.5）、櫻梅桃李（289.4）、發遣（853.6）、制法（400.1）、師範（397.5）、稱美讃嘆（415.6）、風聞（401.1）、炳焉（416.3）、眇眇（279.6）、四壁（346.6）、僻韻（32.3）、蔑如（288.5）、命（196.1）、嘲哢（423.6）、ヰコム（遺恨）（358.5）、忿怨（406.1）、鳧鴈鴛鴦（131.5）。

四、漢音加点の理由

右の漢音読語には、年号・人名・地名・山名・寺名などの固有名詞が35％有る。

また、固有名詞以外の漢音読字は、「長生・平生」「无雙・无爲」「霊瑞」「華山」「外見」などに見られる。これらの漢字は、「衆生・誕生」「无間・无罪」「霊山寺」「華池・華厳」「外相・外道・外邪」など、より多くの呉音読例を本資料中に持つ。

したがって、固有名詞を含めた当該語において、該字の漢音読が一般的であったものと推測される。

以下、呉音読中心資料または呉音読・漢音読ともに使用される資料において、右の諸語が漢音読されているか否かを確認する。

他文献においても本資料と同様に漢音読されていたならば、その語は漢音読が一般的であったとすることができよう。なお、用例の出典には、本稿末尾に記した略号を用いる。

1．他文献の用例

A．固有名詞

『西方指南抄』に見られたa年号類は、古文書に仮名書き例が得られる。山田孝雄『年號讀方考證稿』（一九五〇年、宝文館）では、「長楽寺文書」「東寺百号文書」親鸞筆『教行信証』などの「けんきう（建久）」「けんにん（建仁）」等の仮名書き例を挙げている。『鎌倉遺文』（一九七一年～、東京堂出版）に依れば、「常陸吉田神社文書」「尊勝院文書」「近江山中文書」などの鎌倉時代の古文書を追加することができ、「けんりやく（建暦）」「ふんち（文治）」など『西方指南抄』と同音で読まれた年号の用例が加わる。

b人名類のうち、善導は「和尚（クワシヤウ）」と漢音で呼称される。仮名『往生要集』も、同じく「導和尚（タウクワシヤウ）」（下25オ6）とする。一方、本資料中、善導以外の「和尚」は、一和尚（ワシヤウ）（367.5）・一和尚僧（キチワシヤウソウ）（382.1）と、呉音読されている。この「善導和尚」には、古文書中にも次の仮名書き例が有り、やはり、漢音読されていたことが知られる。[8]

せんたうくわしやう（「僧蓮生（熊谷直実）夢記」〈元久元年五月十三日「山城清涼寺文書」〉）。

「運慶」にも、次の仮名書き例を見出せる。

うんけい（運慶）かことも（子共）の中に（「運慶自筆文書裏書」〈正治元年十月晦日「尊勝院文書」〉）。

阿弥陀さう一尺五寸一体〈ふしたんけい（仏師湛慶）うんけい（運慶）かこ（子）〉（「後鳥羽上皇逆修僧名等目録」〈建保三年五月二十四日「伏見宮記録五十八」〉）。

運慶の長子湛慶の名も「けい（慶）」と漢音読されている。

c地名類の「并州（ヘイシウ）」は、大唐明州（メイシウ）（『作善集』六22）・勢州（セイシウ）人（同上七11）・青（平）州（平）（『前色』下112オ7）のように、漢音読された州名の一つである。奥州（アムシウ）（楊『将門記』194）・州縣（シウ新）（『和泉往来』237）・州城（シウシヤウ）（仮名『往生要集』上31ウ2）等の例も有る。

「天臺山（テンタイサン）、五臺山（コタイサン）、東山（トウサン）、修南山（シウナムサン）」は、『色葉字類抄』の固有名「―山」の音が「比叡山（ヒエイサン）」（下99ウ5）のごとく、すべてサンと読まれている実態を反映する。

「白馬寺（ハクハシ）」は、『色葉字類抄』に「白（入）馬（上濁）　寺名　ハクハ」（上31ウ5）と、「寺名」として挙がっている。

右に掲げた例から、『西方指南抄』の漢音読固有名詞は、漢音読されることが一般的な語であったと考えられる。[9]

B．一般名詞

先に掲げた例の内、本資料中に複数の加点例が存する1～27の漢音読字について、他文献の用例を示す。

1 闇（アム）・黒闇（コクアム）・明闇（ミヤウアム）・癡闇（チアム）―闇（あん（平））（仮名『法華経』一一二二4・一一六二6・一一六三2・一一六八4）・闇（あん）（同・一一六九2・一二五六3）、黒闇（コクアム）（『往生要集』下3オ4）・闇室（アンシツ）（仮

名『往生要集』下47ウ6)、「諒(去)闇(上)　リヤウアム」(『前色』上74ウ5)。

2 殿重・殿重修—殿重(『往生要集』下60オ6)・殿重修(同・中25ウ6)、殿勲(『和泉往来』28)、「殿(平)勲(平濁)　インキン」(『前色』上13オ5)「殿勲　同(ネンコロナリ)」(『黒色』中31ウ5)が有る。親鸞は、『大般涅槃經要文』でも「殿重」(八七2)と加点している。その他、親鸞自筆加点本を移点した専修寺蔵『選択本願念佛集』でも、「イムチウ」の仮名音注が見られる。[10]

3 影像・影堂は、『作善集』でも左のとおり、漢音読されている。御影堂(九9)　南無阿弥陀佛之影　木像畫像　二躰(六24)　御影(二17)　淨名居士影慈恩大師御影(三12)

4 禪下・殿下—『前色』には、「陛(去)下(去)　帝王部　ヘイカ　天子分」(上52ウ6)が掲載されている。

5 舊跡・舊里下—舊跡(『作善集』八8)・聖跡(同上八7)・舊親(『往生要集』上59ウ7)・舊懷(『古往来』207)。

6 去年・逝去は、『前色』でも「去(去)年(平)年月分　去(去)月(入)同」(下60ウ7・キ畳字)「去　サル　丘倨反」(下48ウ5・サ辞字)と、漢音読されている。

7 籠居・居・群居—籠(平)居ロウキヨ　人情部(『前色』上19オ1)、居-住(楊『将門記』263)、居處(『古往来』5)・隠居(同185)。

8 御宇は、『前色』でキの畳字に掲げられている。「御(去)宇(上)」(下61オ7)と「御」の声点は単点ではあるが、ギョと漢音読されたものである。

9 近來・近代—時に関する「近古・近曽」など「古今部」の畳字は、『色葉字類抄』でも幾(キ)の部に収載され、漢音声調を示す去声点が加点されているため、漢音キンで読まれたことがわかる。

10 本懷・素懷—本懷(去)(『古往来』434)・本(平)懷(去濁)　同(人情部)(『前色』上四七ウ7)、素懷　ソクワイ(『黒色』中一九オ6)、素懷(『二色』ソ畳字)。『色葉字類抄』の「本懷」は連濁例であるから、呉音ヱではなく、漢音クワイで読まれたことが知られる。

11 功は、「念佛功つもり」(仮名『往生要集』上105ウ3)、「功」(仮名『法華経』六五六2・七四七2・八一八34・八二〇6・八二二2・八二八1)、「功〈古紅反　コ(上)ウ(平)〉」(『前色』下5オ4)とある。功の単独例は、『色葉字類抄』には無い。

12 沙汰—沙(平)汰(平)　公事分　サタ　選擇分(『前色』下五一ウ1)。

13 山河・山腹・高山・本山・登山—山華(『和泉往来』36)、『色葉字類抄』では、「山川・山庄・山谷・山嶺・山路・山陵」などがサの畳字に掲げられている。

14 終焉は、『往生要集』・『勧信記』などの呉音読中心資料における漢音読例が紹介されている。[11]

15 食肉・不食・食—寝-食(真『将門記』310)・寝食(楊『将門記』305)。なお、本資料中に食事の意で呉音ジキの例も有ることは後

述する。『色葉字類抄』にも、シヨク・ジキの両音が記載されている。

16 当世・遁世—遁（去）世（去）　トンセイ（『前色』上63ウ2）、遁（去）世　トンセイ（『伊呂波』二81ウ4）。

17 長生・平生—長（平）生（上）　老耄分　チヤウセイ（『前色』上69ウ5）。

18 碩徳・碩學—碩（入）徳（入）　セキトク（『前色』下110ウ5）。

19 遺弟・兄弟・師弟—弟　テ（平）イ（上）　特計反（『前色』下19オ3）・昆（平）弟（去）　同（人倫部）（同・下10ウ7）・姪（入）弟（去）　人倫部（同・下22オ5）。

20 都は、ミヤコの意では、「都（平）鄙（上）　同（両合部）トヒ」（『前色』上63ウ3）、「都　ミヤコ　當孤反京—」（『黒色』下61オ8）など、漢音で読まれている。

21 无爲・无雙—無為（『和泉往来』23）、無為　フヰ（『黒色』中106オ3）。

22 神妙—神（平）妙（去濁）　シンヘウ（『前色』下84ウ4）。

23 奉公—奉（去）公（平）　同（公卿部）　ホウコウ　又仕官部（『前色』上47ウ3）、奉公（『古往来』134）。

24 明明は、「明明　不暗」「明明　説之」として用いられている。『二色』でも「明明」（メ重点）とあり、『黒色』でもメの重点に掲げられている。「明白」の意では漢音読されている。

25 蒙昧—蒙昧（仮名『往生要集』下59ウ4）愚蒙　クモウ（『黒色』中49ウ8）。

26 用は、同じ意味の「用ヲナス」（『勧信記』393）・「用途」（『作善集』七26）を見出せる。

27 霊瑞は、『作善集』に「霊瑞地」（五17）の加点例が有る。また、三巻本『色葉字類抄』では、リ篇畳字部には「霊験　リヤウケム」のみで、レ篇に「霊験　レイケン」「霊異　レイイ」「霊童　レイトウ」「霊底　レイテイ」「霊粋　レイスイ」を収載する。二巻本『色葉字類抄』では、リ篇に「霊—」は無く、レ篇に「霊粋　レイスイ」「霊験　レイケン」「霊異」「霊効」を載せる。

以上の例から、『西方指南抄』における漢音読語は、呉音読中心資料あるいは呉音読・漢音読ともに使用される右諸資料において、漢音読されることが一般的な漢語であったと考えられる。[12]

2．漢音読が比較的多く見られる箇所

親鸞加点の訓点に基づいて、『西方指南抄』冒頭から末尾までの一々の漢字について、漢音・呉音等を区別した結果、『西方指南抄』には『教行信証』のような漢音集中箇所は見られなかった。

しかし、そのような『西方指南抄』においても、漢音読語が比較的多く見られる箇所は存した。次の三箇所である。

①曇鸞・道綽・善導・懐感・小康五祖の伝記部分（一八六1～二〇五3）漢字仮名交じり文—三三例・二〇語。

②「聖人御在世之時記註之」「法然聖人御夢想記」「或人念佛之不審ヲ故聖人奉問曰」（二六七2～二九七4）漢字仮名交じり文―二九例・一九語。

③「普告于予門人念佛上人等」「起請」「源空聖人私日記」（三九一1～四四一4）日本漢文訓読文―九〇例・七二語。

右の三箇所は、全一〇二頁であり、そこに計一五二例の漢音加点字が存する。

①三三例・二〇頁　②二九例・三一頁　③九〇例・五一頁　計一五二例　計一〇二頁

①②③以外の部分　計一三〇例　計七四八頁

その他の部分七四八頁に存する全一三〇例の漢音読字数よりも多い。先掲漢音読例の過半数は、全体の12％でしかないこの①②③部分に見られる。よって、①②③部分に漢音読が多いことが認められる。

3．同一語の漢音読例と呉音読例

では、漢音読が比較的多く見られる右①②③部分は、伝記・記録・日記・文書という文章の内容上、年号・地名・人名等の固有名詞や、漢音読が一般的な語彙を他の箇所よりも多く用いているだけなのであろうか。

この部分には、本資料中他の部分では呉音で読まれるにも拘わらず、漢音読される語が存する。左のものである。

i　日月（399.1）―日月燈燭（86.5）・超日月光佛（83.4）。

これは、漢音読「日月」が右の③日本漢文訓読部分に見られ、呉音読「日月」が①②以外の漢字片仮名交じり文に出る例である。

ii　大小老（上）若（入濁）（436.2）―老若〈人事分　ラウニヤク〉（『色葉字類抄』（黒川本）ラ畳字）。

やはり漢音読の「老（上）若（入濁）」は、③日本漢文訓読部分の加点例である。同じく日本漢文訓読資料『和泉往来』にも、「老―若」（174）の加点例が有る。一方、『色葉字類抄』には「ラウニヤク」のみが有り、「ラウシヤク」は無い。

iii　群居（405.6）、籠居（404.4）・籠居（上）（424.2）、居（432.6）―居ス（196.5）、居所（100.2）、各居（405.3）。

iii も、同一語の漢音―呉音対応例を『西方指南抄』中に見出せない。が、いずれも「住まい・住まいする」の意の「居」でありながら、③の日本漢文訓読部分は漢音読、その他では呉音読の例である。ただし、③部分にも一例の「居」が有る。

iv　食（200.1）、食肉（394.1）、不食（315.3）―一食（696.5）、衣食（792.4）、飲食（123.4・124.3・126.1）。

iv は、①③部分に漢音「食」が見られる。なお、「不食」は、「法然聖人臨終行儀」という漢字片仮名交じり文に出現する。これも、「建暦元年十一月十七日藤中納言光親郷ノ奉ニテ院宣ニヨ

リテ十一月二十日戌時ニ」で始まる記録文である。

呉音「食」は、①②③以外の箇所で加点されている。

v　小女（343.5）―小女（343.2）は、近接しており、漢音・呉音の加点理由は不明である。右「法然聖人臨終行儀」の後半で、法然聖人の臨終を夢に見た人の一人として、この「小女」が登場する。まず、「女子」として紹介され、「小女」と言い換えられ、次に「小女」と呼ばれる。

以上、i～vの漢音読語は、いずれも、伝記・日記などの記録文部分に出現する。特に、③の日本漢文訓読部分において、他の部分で呉音で読まれる語が漢音読される。これら同一語における漢音・呉音の読み分けは、漢籍では漢音読、仏書では呉音読される父母―父母・兄弟―兄弟などの対応関係に類似している。

ここで、大部分呉音読される仏書訓読資料の中で、『大慈恩寺三蔵法師傳』『大唐西域記』『高僧傳』などの伝記は、漢音読されていたことが想起される。[13]

日本古訓点資料において、仏書であっても、伝記が漢音読された理由は明確ではない。[14] しかし、その伝統が鎌倉時代の親鸞にも引き継がれているものと考えられる。

五、結論

本稿の目的は、親鸞自筆『西方指南抄』における漢音読語の具体例を指摘し、その存在理由を考察することであった。

検討の結果、次のことが知られた。

『西方指南抄』の漢音読字は全体の1.4%に過ぎない。これらの漢音読字は、当時一般に漢音読された固有名詞あるいは一般名詞の構成要素であり、それらの漢字に親鸞も漢音を加点したものである。

また、次の箇所に比較的多くの漢音読字が見られた。

①曇鸞・道綽・善導・懐感・小康五祖の伝記部分。

②「聖人御在世之時記註之」「法然聖人御夢想記」「或人念佛之不審ヲ故聖人奉問曰」。

③「普告于予門人念佛上人等」「起請」「源空聖人私日記」。

これらの部分では、当時一般に漢音読された漢語を多用するほか、漢音でも呉音でも読まれた語を漢音読することがある。それは、伝記・記録的な文章であること、および、日本漢文訓読部分であることと関係があるらしい。

呉音読を基本とする『西方指南抄』に見られる漢音読字は、そう読まれるべくして漢音読されている。[15]

注

（1）佐々木　勇「親鸞筆『教行信証』の漢音　―出現箇所と加点理由―」（「広島大学学校教育学部紀要　第二部」第19号、一九九七年一月）。

（2）ただし、「かまクラノ・二品比丘尼・聖人ノ・御モトヘ・」（中末

七八1）の「かま」は平仮名である。底本の平仮名を残したものであろう。

（3）漢文は、音読されることも訓読されることもあることが、親鸞自筆加点の訓点から知られる。引用漢訳仏典は、まず音読した後、同一文を訓読している。その音読・訓読の別を、筆の墨・朱の別で親鸞は加点し分ける。これらの本文の文体と親鸞訓点の音読・訓読の別から、『西方指南抄』全体の文章を次のように区別することができる。

1．漢字・片仮名交じり文　2．中国漢文直読　3．中国漢文訓読
4．日本漢文直読　5．日本漢文訓読

（4）一々の漢字についての音種は、『三省堂五十音引き漢和辞典』（二〇〇四年、三省堂）に示した。本稿の認定も、これに従う。

（5）他の親鸞遺文の声点加点例から、呉音読されたと推定される語の場合も、本資料においては「判定不能」とした。また、古文献に呉音加点例を見出せない場合も、「判定不能」としている。

（6）『親鸞聖人真蹟集成』では朱声点の読解が困難であった。しかし、幸い、『西方指南抄』（二〇一二年、同朋舎メディアプラン）のカラー複製本が出版され、朱筆の判読が容易になった。本稿は、この複製本に依拠している。朱声点―七七例、墨声点―二例である。この僅少な声点が、何のために加点されているのかも問題として設定できる。別稿で述べたい。

（7）用例所在を、（　）内に『親鸞聖人真蹟集成』巻第五・巻第六の頁数と行数とで算用数字で示す。314.4は、三一四頁4行目の意である。五三一頁以降は、『西方指南抄』下本・下末（『真蹟集成』巻第六）である。

（8）以下、『鎌倉遺文』に基づく。

（9）親鸞在世時における固有名詞の読みを記した訓点資料は、親鸞加点本以外には希であるため、漢音読固有名詞の全例について、他資料の例を示すことは困難である。しかし、得られた例から推測して、このように考えることが許されよう。他文献における用例探索を続けたい。

（10）佐々木　勇編『専修寺蔵「選擇本願念佛集」延書　影印・翻刻と総索引』（二〇一一年、笠間書院）、参照。

（11）宇都宮　啓吾「和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて―「往生伝」を出自とする漢語の存在―」（『鎌倉時代語研究』第十五輯、一九九二年五月）。

（12）『西方指南抄』における用例一例のみの漢音読字についても同様に考えられる。左に、紙幅の許す範囲で例を掲げる。

鸚鵡（アウム）―　鸚（去）鵡（平）　能言　アウム　（『前色』下27オ3）、鸚鵡（アウム）（仮名『往生要集』下10ウ2）。

暗誦（アムシュ）―　暗（去）誦（平）　文書部　アンシウ　（『前色』下39ウ1）。暗壊（アンヤイ）（『和泉往来』221）、暗（あん）（平）蔽（へい）（平）（仮名『法華経』二二五6）。

中陰（チウイム）―陰德（インムトク）（仮名『往生要集』上96オ5）・陰蔵（インザウ）（同・下19ウ7）。

眼前（カンセン）―眼（カン）（上濁）前（セン）（平濁）（『勧信記』上181）、眼界（カンカイ）（仮名『往生要集』下17オ2）。

諷諫（フカン）―　諷諫　フカン　（『黒色』中107ウ4）。

禁遏（キムアツ）―　禁遏　キムアツ　（『前色』下63オ1）。

錦繡（キムシウ）―　錦繡　キムシウ　（『前色』下63オ5）。

異香（イキャウ）―香（キャウ）（平）　カウ芳也・香（キャウ）（平）　カウハシ　又カ（上）（『前色』上100ウ2・5）。

他郷（タキャウ）―他郷（タキャウ）（仮名『往生要集』下49ウ7）、郷（キャウ）　サト　古―（『前色』下42ウ5）・郷（キャウ）（平）里（上）　キヤウリ（同・下61オ2）。

外見（クワイケン）―外　クワイ　ト　内―（『前色』上58オ3）等、『色葉字類抄』の「外」にはクワイの音注しか無い。

頑嚚（クワンロン）―頑（くわん）魯（ろ）（『黒谷』三26ウ7）。

狂乱（クキヤウラン）―冤狂（エンクキヤウ）（真『将門記』358）、狂　クキヤウス（『黒色』中74ウ5・ク人事）。

恐怯（クキヨウ（キ））、―恐（クキヨウ）（上）慄（リツ）（『古往来』11）。

凶敵（クキヨウテキ）（410.2）―凶叟（クキヨウ）（真『将門記』492）。

別業（ベチケフ）（入）別　業（入濁）　庄園分　ヘツケフ（『前色』上52ウ4）。

不足言—愛言（『和泉往来』86）、金言（『黒谷』五45オ6・六6ウ2・六24オ2）。
後悔—後（去）悔（平）（『勧信記』上644）、後悔（『黒谷』一21ウ4・二49オ5・六5ウ1・七5オ4）。
三市—三（去）市（平濁）（仮名『法華経』一二九九5）・三市（同八四六5）・周市（同二〇九1・二一八1・二五八6・五四八4・九八一3）。
愁歎—愁（去）歎（平）聲（上）（仮名『法華経』一〇一八1）。
儒者　シユシヤ（『前色』下82ウ3）。
矯飾　詐偽分　ケウシヨク（『黒色』中99オ1）。
唐人—稠人（『和泉往来』123）、野人（同上159）、讒（平）人（楊『将門記』174）。
潔齋—御齋（『古往来』202）。
カムセキ（厳石）—厳（平濁）石（入濁）山岳部　カムセキ（『前色』上106ウ5）。
大（去）綱—大（去）僻（『往生要集』中64オ7）、大（去）唐（平）（『勧信記』77）。
停午—停午（『黒色』下64オ6）。
天聽—哀聽（『和泉往来』26）
涕唾—涕（去）唾（『黒谷』三46ウ6）、涕涙（真『将門記』330）・涙（リウ）・涕（楊『将門記』333）、涕泣（ていつ）（仮名『法華経』四五一2）。
トウリウ（逗留）—逗（平）留（楊『将門記』89）、「逗（平）留（平）　稽留部　トウリウ」（『前色』上六三オ5）、「逗留　トウリウ」（『伊呂波』二82ウ5）。
櫻梅桃李—紅梅（『古往来』167）、塩梅（『和泉往来』243）、楊梅（『黒色』中83オ8）、紅桃（『和泉往来』55）、李桃（同上・中21オ4）。
發遣—發遣（楊『将門記』134）、發（入）遣（平）　ハツケム（『前色』上33ウ3）。
制法—制（去）　法（入）　法家部　セイハウ（『前色』下111ウ2）。
稱美讃嘆—もしは・美・もしは・不美（仮名『法華経』一〇四五5）・美麗（『和泉往来』80）・美酒（同54）・美艶（同91）・細美（同上44）・美（上濁）物（入濁）（『勧信記』343）。
風聞—風聞　フフン（『黒色』中107オ7）。
炳焉—炳（上）焉（平）　ヘイエン（『前色』上53ウ4）。
眇眇—眇、眇、（『和泉往来』236・『伊呂波』二53ウ5）。
四壁—壁（『往生要集』上41ウ7）。
僻韻—大（去）僻（『往生要集』中64オ7）。
蔑如—蔑（入濁）如（平濁）　ヘツシヨ（『前色』上53オ2）。
命—命（メイ）（『往生要集』上27ウ1）・命（メイシテ）（同・上43オ7）、命メイ　眉病反　教也（『黒色』下五八ウ4）とあり、一字漢語「命（ミヤウ）」は掲出していない。『二色』も、「命メイ」（メ人事）のみで、「命（ミヤウ）」を挙げない。「命令」の意の「命」は、漢音読されたのであろう。
牛コム（遺恨）—「遺恨　牛コン」（『黒色』中57ウ4）。
忿怨—忿怨　フンエン（『黒色』中106ウ1）、怨（楊『将門記』49）。
鴛鴦—鴛鴦（最明寺本『宝物集』10ウ9）。

その他、『注好選』（観智院本・金剛寺本）・『尾張国解文』や講式・表白などの日本漢文訓点資料に類例を拾うことができる。山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』、参照。

(13) 築島裕『国語の歴史』（一九七七年、東京大学出版会）36頁。

(14) 築島裕は、右注著書37頁で、これらの仏典の成立時が中国における漢音の時代であり、「伝記や地誌の類などを始として、四六駢儷体などは多く漢音で読まれるようになり、その影響によってこれらの書物も漢音に変った」と推測している。しかし、沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）163頁では、「なぜこれ等が漢音を用いたのかは未詳である。」とする。

(15) 本稿の結論は、きわめて常識的なものである。しかし、それは、親鸞加点資料のごとき稠密な字音加点資料に基づく全体調査によって初めて実証できる。容易に推測されることがらであっても具体的な証拠を示すこ

とが、今後の研究上必要であると考えている。

［引用文献］（資料名―略称。引用原典。）

楊守敬旧蔵本『将門記』一〇五〇年～一〇八〇年頃点―楊『将門記』。貴重古典籍刊行会叢書複製本（一九五五年）および『千葉県の歴史　資料編　古代』（千葉県史料研究財団、一九九六年）。

真福寺本『将門記』承徳三年（一〇九九）点―真『将門記』。原本調査。

高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点―『和泉往来』。『和泉往来』（一九八一年、貴重古典籍刊行會）および築島裕編『高野山西南院蔵本和泉往來總索引』（二〇〇四年、汲古書院）。

最明寺本『往生要集』院政期墨点―『往生要集』。築島裕編『最明寺本往生要集　影印篇』（一九九八年、汲古書院）。

浄福寺本『仮名書き往生要集』鎌倉初期写本―仮名『往生要集』。西田直樹・西田直敏編著『浄福寺本仮名書き往生要集』（一九九四年、おうふう）。

高山寺本『古往来』鎌倉初期点―『古往来』。高山寺典籍文書綜合調査團編『高山寺本古往來表白集』（一九七二年、東京大學出版會）。

東京大学史料編纂所蔵『南無阿弥陀仏作善集』鎌倉初期点―『作善集』。東京大学史料編纂所編纂『平安鎌倉記録典籍集』（二〇〇七年、八木書店）。

大東急記念文庫蔵『光明真言土沙勧信記』鎌倉初期点―『勧信記』。原本調査。

妙一記念館蔵『仮名書き法華経』鎌倉中期写本―仮名『法華経』。中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経　影印篇』（一九八八年、勉誠社）。

龍谷大学蔵『黒谷上人語燈録』元亨元年（一三二一）頃点―『黒谷』。龍谷大学図書館貴重書画像データベースおよび浅井成海編『黒谷上人語燈録　和語集』（一九九六年、同朋舎出版）。

三巻本『色葉字類抄』（前田家本）院政末期写本―『前色』。前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成　18』（一九九九年、八木書店）。

三巻本『色葉字類抄』（黒川家本）江戸初期写本―『黒色』。中田祝夫・峰岸明共編『色葉字類抄研究並びに総合索引　黒川本影印篇』（一九八七年、風間書房）。

二巻本『色葉字類抄』永禄八年（一五六五）写本―『二色』。前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成　19』（一九九九年、八木書店）。

学習院大学蔵『伊呂波字類抄』鎌倉初期写本―『伊呂波』。『古辞書音義集成　14』（一九八六年、汲古書院）。

―ささき・いさむ、広島大学大学院教育学研究科教授―